

TOTTORI UNIVERSITY HOSPITAL CENTER FOR CLINICAL RESIDENCY PROGRAM

鳥取大学医学部附属病院

## 研修センターだより

鳥取大学 卒後臨床研修センター 第24・25合併号 2013年9月1日発行

## ✕ 第24・25合併号の紙面 ✕

## ●新センター長挨拶

1ページ. 初期臨床研修に求められるものとは  
 卒後臨床研修センター長 山本一博

## ●今号のニュース・話題

2ページ. コロンビア大学指導医の来学 荻野和秀  
 2~3ページ. 平成24年度臨床研修修了式の挙行 荻野和秀  
 3ページ. 鳥大臨床研修合同説明会の開催 荻野和秀

4ページ. 平成25年度オリエンテーション、  
 ホスピタリティ研修会を開催 中本成紀

## ●シリーズ

4~5ページ. 研修医今昔物語~私の研修医時代、そして今~  
 第二内科 岡野淳一

5ページ. 研修医日誌

鳥取大学医学部附属病院 2年目研修医 梶谷直史

6ページ. 今後の予定

## 新センター長挨拶

## 初期臨床研修に求められるものとは

卒後臨床研修センター長 山本 一博



私が医師になって27年たち、その間に研修システムは大きく変わりましたが、初期研修の目標は良い医師になる礎を築くことであり、以前と同じです。研修システムの変更とは、この目的を達成するための手法が変わっただけです。

「良い医師」の定義は人によって異なるでしょうが、豊富な知識と優れた技術を有し、かつ豊かな人間性を備えるというのはその中に必ず含まれる要素であると思います。これらの礎となる重要な能力が「思考力」です。「考える」ということから逃げている医師が良い医師になった例は見たことがありません。最近ガイドラインに沿った医療を行うことが求められますが、これは最低ラインであり、「ガイドラインに記載されていること以外ではできない医師」を育成することが求められているわけではありません。患者さんの高齢化もあり、複数の疾患を合併している人が少なくない中で、ガイドラインを当

てはめるだけでは診療プランを立てることができない患者さんが増えています。そのような患者さんに対応できるか否かは、単なる経験症例数では決まりません。多くの患者さんを受け持った経験があっても、目的意識を有さず、自ら考えることなく、人から言われたままに診療してきた医師は、誰でも対処できる患者さんに対応できる医師になるのが精一杯でしょう。実際には、それさえ難しいと思います。つまり「良い医師」にはなれません。一方、例え経験症例数が少なくても考えながら診療する習慣を身に付けた医師は、難しい症例にアプローチする道を自ら開くことができます。

鳥取大学医学部附属病院では、良い医師になるための礎である「思考力」を身に付けてもらうことに特に重点を置いています。疾患ではなく患者さんを診ることを心がけていますから、複数の疾患を有する患者さんを受け持つことで、いわゆる「general」な医師としての能力も身に付きます、というか身に付けなければ大学病院の患者さんには対応できません。ただし、いずれの能力も与えられることを待っているには身に付きません。自ら能動的にそのような力を身に付けようとしてください。強い前向きな気持ちのある若手医師には、本学のスタッフは熱く応えてくれるはずです。

これから数十年の人生をかけて進む医師としての道の大切な第一歩を、鳥取大学医学部附属病院から踏み出してみませんか？

## ニュース・話題

### コロンビア大学指導医の来学

卒後臨床研修センター 副センター長 荻野 和秀

平成25年3月7日～9日の3日間、米国コロンビア大学病院より消化器内科のDavid D Markowitz准教授をお招きして、研修医の指導を行っていただきました。内容は、Markowitz先生の専門領域である消化器疾患を中心に、嚥下障害などの症候やGERD・炎症性腸疾患などの疾患のレクチャーやケースセッションを行いました。また、消化器の専門的な疾患だけでなく、Clostridium difficile感染症などの医師にとって遭遇する可能性のある重要なテーマもいくつか話していただきました。さらに研修医の先生も自身の症例をパワーポイントで発表したり、ベッドサイドでMarkowitz先生と一緒に診察を行ったりしました。米国ではありふれた疾患が日本ではめずらしい疾患という地域差や民族差をとっても感じ興味深



い内容でした。また、初日の歓迎会と最終日の送別会では医学以外の様々な話題で盛り上がり、さらに多くの指導医の先生や学生の皆さんも参加し、とても有意義な3日間だったと思います。今回の研修が、将来、専門医や指導医という立場になる研修医にとって、世界に目を向ける一歩となってもらえれば幸いです。最後に、今回の研修にあたり多大なるご指導とご協力いただいた第一内科、第二内科、第三内科および第一外科の科長を初めとする指導医の皆さんに厚く御礼申し上げます。



David D Markowitz 准教授との記念写真



### 平成24年度臨床研修修了式の挙行

3月27日(水)、平成24年度鳥取大学医学部附属病院臨床研修修了証書授与式を開催しました。今年度は、医科21名、歯科4名の研修医の先生方が初期臨床研修を修了しました。授与式において、北野病院長からひとりひとりに修了証書が授与され、3名の先生(前角衣美先生、矢内正晶先生、山田真悠子先生)がベストレジデント賞を受賞しました。引き続き優秀指導医賞を8名の指導医の先生(生越智文先生、唐



下泰一先生、武田賢一先生、徳永志保先生、藤原義和先生、藤岡真治先生、長谷川泰之先生、塚本和充先生)に授与されました。研修医の皆さんには、本院での臨床研修での経験を生かし、後期研修も頑張してほしいと思います。





平成24年度臨床研修修了証書授与式にて



## 鳥大臨床研修合同説明会の開催

5月8日(水)、国際ファミリープラザにおいて、卒業初期・後期臨床研修合同説明会を開催しました。第1部では、鳥取大学病院の関連基幹型病院と鳥取大学医学部附属病院の計9病院が、各病院の臨床研修内容について判り易くプレゼンテーションを行いました。続いて第2部では、基幹型の10病院と鳥取

大学医学部附属病院の診療科(部)の各ブースにおいて個別に面談を行いました。学生や研修医の皆さんは、それぞれ興味のあるブースを自由に廻り、初期研修や後期研修について多岐にわたり話をすることができました。

今回の説明会には学生99名、研修医30名もの参加があり大盛況でした。各病院と鳥取大学病院の魅力が大いに伝わったと思います。



## 平成25年度 オリエンテーション、 ホスピタリティ研修会を開催

卒後臨床研修センター 中本 成紀

4月1日(月)、医学部記念講堂において平成25年度新採用職員オリエンテーションが実施されました。今年度は鳥取大学附属病院からスタートする初期研修医が8名と、例年より少なめの参加となりましたが、一人ひとりがこれから2年間の研修生活を充実したものとするよう、新たな気持ちで臨んでいたのではないでしょう。

また翌4月2日からは約1週間にわたりプレローテーションが行なわれました。ここでは4名ずつ2グルー

プに分かれ、医療サービス科、薬剤部、リハビリテーション部、看護部などを回り病院の全体像を理解しました。ひき続き4月9日(火)の午後からは、皆生温泉の旅館で一泊二日のホスピタリティ研修が行われました。これは研修医だけでなく看護師、薬剤師をはじめ各領域の新人が受ける研修で、今年度は総勢81名が参加しました。他病院での事例を示しながらの実践的な接遇指導を受け、社会人としての自覚が芽生えたと同時に、他部門の職員との交流の意味でも、良い機会になったのではないかと思います。

また少し遅れて4月30日(火)には、センター教員および各診療科指導医、2年目研修医も交えての歓迎会を朝日町の居酒屋で盛大に行いました。

## 研修医今昔物語 ～私の研修医時代、そして今～

第二内科講師 岡野 淳 一

肝臓内科を専門としている岡野淳一と申します。高校および専攻科(浪人)までは米子市で学びましたが、1991年(平成3年)に九州大学を卒業後、門司労災病院(現門司メディカルセンター)および九州大学病院第三内科で研修を行い、1993年(平成5年)以降は主に鳥取大学で勤務させていただいています。卒後1年目に赴任した門司労災病院は関門海峡のお膝元にあり、今でこそ門司港レトロとして観光施設が整備され賑わいを見せていますが、当時はまだ倉庫街の殺伐とした雰囲気の残る場所でした。門司区の人口は10万人程度でしたが、C型肝炎キャリアが多い地域であり、当時肝臓疾患患者さんを多く診させていただいたことが、現在の専門決定への伏線となったと感じています。門司労災病院での採血は看護婦(現看護師)さんの仕事でしたが、将来採血ができないと困るからと先輩からの勧めもあり、門司労災病院に赴任してからの数ヶ月間は毎朝4時30分頃に病棟へ行き、看護婦さんが済ませてしまう前に採血をさせてもらったのですが、しばしば青痣を作って眠気眼の患者さんから叱られ、看護婦さんから嫌がられつつも尻ぬぐいをしてもらったことを思い出します。当時患者さんや看護婦さんに揉まれたことによって、自然とトラブルへの対処法を学び、今でも続いている朝型の生活も身に付いたのだと思います。指導医は固定していませんでしたが、消化管は田中 晃先生(現田中あきら内科クリニック院長)、肝臓は荻原 健先生(現宮田内科医院院長)、糖尿病は石井英博先生(現済生会二日市病院内科部長)という蒼々たる先生方にご指導いただきました。当時の月給は約16万円だったと記憶していますが、少ない

だろうとの計らいで宮若市(旧鞍手郡若宮町)の個人病院に宿直のアルバイトに時々行っていました。何かと大目に見てもらえる悠長な時代だったことが偲ばれます。

卒後2年目に赴任した九大病院第三内科には、内分泌・代謝、糖尿病、肝臓、消化器、膵臓、血液と多岐に渡る診療グループがあり、合わせて5～6名の患者を受け持っていました。当時の研修医には多くの業務が課せられており、紙伝票で採血オーダーした受け持ち患者さんのスピッツとラベルを前日夜準備し、翌朝採血を行い、アナリーゼのプレパラートを引き、乾燥したら顕微鏡で血球を自らカウントするのが日課でした。顕微鏡下に白血病で化学療法中の患者さんの数少ない好中球を見つけ出し、blastの増減に一喜一憂していました。研修医の採血が終わるまで患者さんは朝絶食で待ちますので、訪室が遅くなると医師患者関係が悪くなります。便潜血、便虫卵検査、尿沈渣検査も研修医の仕事であり、尿を自ら遠沈し鏡検していましたが、手間がかかるため必要最小限のオーダーにしていた覚えがあります(時効)。受け持ち患者さんの注射と点滴も研修医の仕事でしたので、午前中はこれらの業務で潰れていました。当時の九大病院第三内科病棟の主治医は、驚くことに研修医にほぼ一任されていました。1年目の研修医も単独で主治医となり、その指導は2年目の研修医が主に行っていました。上級医からのアドバイスを求めることもありましたが、インターネットは普及し





ておらず、疑問点は主に図書館に足を運び文献から解決していました。診療グループの数だけカンファレンスもありましたので、研修医はその準備に追われ、週1回の教授回診も手厳しい時代でした。大学から支給される月給は10万円程度であり、埋め合わせのため隣の民間病院や済生会福岡総合病院へ定期的に当直に行き、先輩の代わりに個人医院の診療アルバイトをすることも偶にありました。済生会福岡総合病院は百万都市の中心にある第一線の病院ですが、土日48時間連続の日当直を2年目の研修医が週替わりで受け持っていたことには、背筋が凍る思いです。多くの悪しき思い出が脳裏を過ぎりましたが、人間味のある先生方も多くおられ、当時病棟医長だった柳瀬敏彦先生(現福岡大学内分糖尿内科学科教授)は、私が症例発表する日本内科学会九州地方会の会場(熊本だったと思います)まで運転が未熟な私の白い中古のブルーバードの助手席に座り同行されたことや、替わって病棟医長になられた高柳涼一先生(現九州大学第三内科教授)は多くの研修医をご自宅に招かれて宴会を催されたことが懐かしく思い出されます。また、当時九大第三内科を率いておられた名和田新教授は、私が研修修了後に米子へ戻

りたい意向を教授室で伝えただけに嫌な顔ひとつされず、当時の鳥取大学第二内科川崎寛中教授へと話を円滑に進めていただき、卒後

3年目を現在所属する鳥取大学第二内科で迎えることができ、同年4月の私の結婚式にはわざわざ米子まで足を運んでいただいたことには、感謝の言葉もありません。その後、現在まで大学病院勤務が長くなったのは、これらの先生方に恩返しをしななければいけないとの潜在意識が働いたのだと思います。

現在の卒後臨床研修制度は、私が体験した前時代的な研修のあり方を猛省し、臨床実習内容、指導体制、収入面等多くの点で劇的に改善されていると思います。今の研修医の先生方は、臨床研修に集中できる恵まれた環境にあると思いますので、引き続き切磋琢磨されることを望んでいます。



現在の門司港、右手奥が門司労災病院(現門司メディカルセンター)

## 研修医日誌

鳥取大学医学部附属病院 研修医2年目 梶谷 直史

こんにちは、研修医2年目の梶谷直史と申します。研修生活も気が付けば残すところ3分の1となりました。

私は自由選択プログラムを選択しており、1年目を松江市立病院で内科や救急などの必修科や小児科、麻酔科などの選択必修科を、2年目から鳥取大学附属病院で救急、地域研修のほか10か月間を自由に選択し研修しています。

1年目、特に最初の半年間は病棟業務に関する知識が全くなく、カルテの使い方、コンサルトの仕方、診療情報提供書の書き方、カンファレンスでのプレゼンテーション方法と全てにおいて、指導医の先生に手取、足取りご指導頂きました。市中病院ではcommon disease数多く経験します。救急外来など研修医がファーストタッチで診療にあたることも多く、問診、身体診察など見落としがちなドキドキしながらも指導医の先生やスタッフのみなさんに暖かく見守って頂き、無事に研修させていただきました。

大学病院では、医師の数が多く、市中病院では経験できないような稀な症例や難症例を経験することができます。様々な専門の先生がたくさんいるのでいろいろ教わることができますし、興味がある分野の科を重点的に研修し、最先端の技術が学べると感じます。

また、毎週のように研修医向けのセミナーがあり、他科の分野についても勉強できる良い機会になります。

研修全体を通して感じたことは、自分は環境に恵まれているなということです。充実した研修ができるようにと、研修センターの方がお忙しい中サポートして下さい、各科の指導医の先生方には申し訳ないほどよくしていただきました。

もう一つ、研修生活を充実して行えている理由は同期がたくさんいる点だと思います。30人以上いる同期とは、研修医室で真剣に語ったり・楽しく笑ったり、仕事帰りの夕飯・週末の飲み会等とても有意義な時間を過ごしています。長い医師人生、ともに高めあった仲間とはこれからも繋がってほしいと思います。

つたない文章となってしまいましたが、今後も感謝の気持ちを忘れずに日々成長していきたいと思っています。



### 鳥取大学医学部附属病院卒後初期臨床研修における研修理念

将来、医療現場のリーダーとしてふさわしい安全・安心で、  
最高・最適な医療を提供できる優れた医療人となるために、

1. 医師としての高い倫理性・道徳性を修得する。
2. 常に患者および家族の立場に立ち、医療を実践する。
3. 日常診療で頻繁に遭遇する病態・疾患に適切に対応できる基本的臨床能力（知識、技能、態度）を修得する。



## 今後の予定

### ① 平成25年度第一回鳥取県臨床研修セミナー開催について

日 時：平成25年10月10日(木)18時～20時

場 所：アレスコ棟2階第1会議室

講 師：名古屋大学総合診療科 伴 信太郎 教授

テーマ：ケースカンファレンス

総合診療外来での興味深い症例を提示して、病歴や身体所見から鑑別診断を考えていく参加型カンファレンスです。研修医だけでなく指導医の参加も大歓迎です。

### ② 平成25年度鳥取大学医学部附属病院指導医養成講習会開催について

日 時：平成25年11月16日(土)～17日(日)

場 所：鳥取大学医学部アレスコ棟

### 編集後記

前号よりずいぶんと間が開いてしまいましたが、ようやく24号を発行することができました。3月に研修が修了した先生方を送り出したと思えば、すぐに新たな研修医を迎え入れ、人の流れもいろいろとありましたが、今年もあと4か月と時間がたつのは早いものです。来年度のマッチングもそろそろで、鳥取大学にマッチしてくれる人が増えることを大いに期待したいところです。

(中本成紀)



### 鳥取大学医学部附属病院 卒後臨床研修センター

〒683-8504 鳥取県米子市西町36-1

TEL: (0859) 38-7025 FAX: (0859) 38-6974

e-MAIL: [sotsugo@med.tottori-u.ac.jp](mailto:sotsugo@med.tottori-u.ac.jp)

URL: <http://www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/sotugo/>